

## 組合に耳を傾けていれば、 マスコミに書かれず

2010年度第1回団交は、6月14日、午後6時から開催されました。私たちは、既に6月10日に理事会に提出してあった「2010年度組合要求事項」（次号に掲載予定）の回答を期待しました。しかし、理事会は時間がほしいとの理由で、今回は賞与以外殆ど協議の対象にはなりません。賞与は「月うちに提案をする」、「昨年と同様程度」との見込みのみが専務理事から語られただけでした。

北元喜朗理事長の「お手盛り増額100万円」の問題は、4月23日に初めてマスコミに取り上げられました。「文科省が北陸大学調査」（北國）に続いて、6月6日には「北陸大『お手盛り』文科省指摘」（北陸中日）、翌6月7日、「北陸大、理事長報酬増額を撤回 文科省指摘で」（共同通信、全国配信）、6月8日「北陸大理事長の報酬増額を撤回 文部省指摘受け」（北國）と、理事長の高額報酬の問題が続々と報じられました。

### 組合は既に「病気を知らせ」ていた

私たち教職員組合は、これらの報道に先立って、3ヶ月前の1月28日の『ニュース』（291号）で、理事長の「月俸100万円アップ」を取り上げました。更に2月4日の団体交渉でも、以下のように追及しました。

教職組：理事長が自らの給与を100円アップさせた、というのが本当か？

理事会：本当。だがこの場で扱うテーマではない（中川専務理事）。

教職組：潤沢な財源ならばまだしも、①公平感が失われ②教職員の給与、賞与が減額されている時に③特定部分の増額はおかしい。

何故、この場のテーマではないのか？

理事会：ノーコメント（中川専務理事）。

この時、理事会は組合の指摘に真摯に向き合っていれば、上述のような記事は出現しなかったであろう。この時点で下げることも可能であった。まさに教職組の機能一つは「病気を知らせる神経」である（『ニュース』286号、2009. 6. 22）。

### 専務理事への「質問状」

「ノーコメント」、問答無用という姿勢に固執する理事会に、私たちは6月3日、専務理事宛てに「質問状」を出し、文書回答を求めました（別紙ご参照）。しかし専務理事は回答をしないので、今回の第1回団交にて回答を求めました。以下に議論の概要を報告します（①～④は「別紙「質問状」の番号に対応」）。

### ①事実として：役員報酬は団交のテーマ

教職組：何故、ノーコメントなのか？

理事会：役員報酬は団交のテーマではない（中川専務理事）。

教職組：それは誰が決め、何処に書いてあるのか。

理事会：どこにも書いてない（同）。

教職組：（団交テーマの決定はそもそも労使の協議事項だ）しかも事実として過去に何度もテーマにしてきた。第1は、高額な役員報酬を受けている理事が「1人いて、基準を超えている」と当の中川理事が団交で回答している（『ニュース』292号、2010.2.21、但し正確には4人もいて、4000万円の補助金がカットされた）。第2は、松村幸男労務担当理事が、法廷で、弁護士の質問「役員報酬が幾らだということは答えたんですか」という問いに対して、「答えております」と述べている（松村『証人調書』2009.4.17、49頁。但しこれは虚偽発言である。詳細は、『ニュース』288,292号ご参照）。

私たちは、役員報酬は今後も団交のテーマにすることをやめない。ここに理事会の体質が凝縮されているからである。

### ②増額理由のやましさ

教職組：増額した理由は何か？

理事会：教育改革で陣頭指揮をした。私立の大学の協会の副会長として貢献した。寸暇を惜しんで飛び回って努力した（中川専務理事）。

教職組：もしそうならば、下げる必要はないではないか。自信を持ってアップし続ければよい。やましいことはないはずだ。

このことはこれらの「貢献」が真の理由ではなく、後付けであることを窺わせる。

### ③、④ 増額分をさかのぼり返却せよ

教職組：いつからアップしたのか？

理事会：昨年の秋からだ。

教職組：増額し、しかし元に戻したというのならば、増額は適切だと思うか？

理事会：不適切だった。好ましくはないと文科省に言われた（中川専務理事）。

教職組：不適切、好ましくないならば、元に戻すだけでなく、さかのぼってアップ額を返却すべきだ。

理事会：「・・・」

教職組：好ましくなく、不適切な増額が全国に知れわたった責任は、理事長、理事会にある。どのように責任をとるのか。

理事会：責任といわれても。

教職組：時間外労働、休日出勤をさせ、10年間も不払い労働をさせておきながら、理事会にはだれか責任をとった理事がいるのか。例えば、理事が辞任する、給与を下げる、学内に謝罪の掲示を貼る・・・と責任の取り方は多様にある。誰も全く責任をとらない、だから何度でも同じ事が繰り返される。

### ⑤ **またも補助金のカット**

教職組：補助金（私学助成金）はカットされたのか？

理事会：そうだ（中川専務理事）。

本来、学生、教職員の教育、研究、福利厚生に充てられるはずの私学助成金が、理事長、理事会の「大学私物化」（北陸中日、010.4.30）により、カットされた。

### ⑥ **「中川氏文書」：理事会が自ら示す悪例**

教職組：中川専務理事は今年の2月26日付けで「進むべき道は変わらない」と題する文書を出している。ここに「求められるべきことは、大学としての全体最適であり、個々人の部分最適、自己の都合による自分だけの最適でもないのです」と記されているが、「全体最適」「部分最適」とはどういう意味か。

理事会：「大学全体のためになるのが全体最適で・・・」（中川）

教職組：こんな意味不明の言葉の背後には、「全体」と「部分」は相反し、敵対するという考えがある。「全体」か「部分」か、のアレかコレか（の貧困な発想）しかない。部分もよく、全体のためにもなるよう努力するのが経営者だ。自分だけの100万円アップ、そして「好ましくない」と言われ、下げ、同時に大学の社会的評価・評判も下げたのは、「全体最適」を考えない、理事長と理事会だけの「部分最適」の好例だ。貴方の挙げたよくない例を理事会が（反面教師として！）実践している。

このように「部分」と「全体」を敵対的にとらえている限り、この理事会の下では常に部分は全体のために切り捨てられる。太るのは理事会だけだ。教職員、学生、父母は、こういう理事会には退散をしてもらいたいと思うだろう。「部分」が大切にされ、働きがいと意欲と信頼を持ててこそ、「全体」も豊かになる。両者は敵対関係にはない。

#### **<お詫びと訂正>**

前号『ニュース』（295号、2010.5.28）で、教員養成課程新設に関して誤った記事を記したことをお詫びし、訂正致します。「教員は審査を受けていない」という文言を削除致します。ご迷惑をおかけしました。お知らせ下さった方に感謝致します。ありがとうございました。

## 投 書

『組合ニュース』へ投書がありましたので、以下に掲載致します。投書をして下さりありがとうございました。

### 理事長への手紙

過日の新聞報道によると、あなたは、昨年9月から、月約280万円から約380万円へ昇給されたそうですね。その後、今年の4月、文科省が事情を聴取し「他大学と比べ高すぎる」と指摘を受けると、あなたは翌月からの増額撤回を了承したと報じられています。

これらの報道は事実でしょうか。公的存在として税制上の優遇措置を受ける学校法人のトップとしてあなたは教職員や学生はもとより、広く社会に対して説明すべき責任があるのではないのでしょうか。これは北陸大学の名誉にかかわる重大な問題です。

ここ数年、我々教職員の給与はほとんど据え置かれ、さらに賞与は廃止され、特別措置という形で、大幅な減額にもかかわらず、まるで恩恵の如く支給されています。よって、ここ数年の教職員の年収は、100万から200万円の大幅減少となっており、住宅ローンその他、生活の見直しを迫られています。

我々教職員には、財政状況の厳しさ故に、こうした給与の減額を口を酸っぱく強調しながら、自らは破格の報酬を得るといふあなたの行為を我々をどのように理解すればいいのでしょうか。

学生への温かい愛情を最優先されるあなたの、私学助成補助金を減額されてまで、高い報酬を得たいとする思いが我々には到底理解できません。「邂逅と謝恩」をモットーとするあなたであれば、たとえ、取り巻きが100万円の昇給を提案したとしても、それをたしなめ、断乎これを拒否するのが、大学のトップとしてあなたの誇りではなかったのでしょうか。否、真に大学の財政が厳しいのであれば、経営トップのあなた自身が、自ら報酬減額を率先し、それによって教職員の信頼を得、以て全員一丸となって大学再生への道を歩むことが可能となるのではないのでしょうか。それが真理と正義を希求するの大学経営責任者の矜持ではないですか。

あなたに耳障りのいいことしかいわない側近よりも、むしろあなたに直言する人たちこそ、北陸大学の未来を憂える志のある優秀な人たちではないのでしょうか。そういう教職員が数多く本学を去っていったのはまことに残念至極です。

我々は、どの大学の教員よりも目の前の学生を大事にして、その教育に邁進しているという自負があります。さらにこうしたなかで、少しでもオリジナルな研究の成果を出したいと研究にいそしんでいます。これこそ我々大学教員の誇りであります。どうか、あなたは、こうした教員の取り組みを評価され、それにふさわしい処遇をされるよう望みます。

我々教員は、教育と研究に没頭でき、それなりの大学教員としての誇りが保てる報酬を求めているに過ぎません。あなたの報酬は日本の大学経営者のなかでは、おそらくトップクラスですが、我々教員の給与は、おそらく全国の私立大学のほとんど最下位に位置するのではないのでしょうか。

しかし、お金の問題よりももっと大事な問題があります。それは通常の企業経営者よりはるかに高い道徳的責任を求められる大学経営者としての資質に関わる問題です。大学のトップの姿勢は、その大学の本質に関わります。大学パンフレットでいくら「愛情と情熱を注いで、学生の人格形成に尽くす教育」と謳っても、トップの人格が疑われるようでは、説得力がありません。

どうか、あなたには、本学の薬学部のスローガン「人の痛みが分かる薬剤師」の養成よろしく、我々教職員や学生の痛みを思いを馳せ、大学トップにふさわしい見識ある行動をとられるよう切に希望します。

学校法人 北陸大学  
中川幸一専務理事殿

北陸大学教職員組合  
執行委員長 荒川 靖

## 質 問 状

私たち北陸大学教職員組合は、教職員の給与が実質カットされ、給与が大幅に減額されてきている今日、理事長が給与の「月額100万円をアップした」点の真偽を、組合ニュースや団体交渉で問題にしてみました。

貴殿は、この点について2010年2月4日の団交にて、私たちの真相を求める問いに対して、「ノーコメント」と回答しました。

4月23日、「文科省が北陸大学調査」と題する記事（北國新聞）にて、「月額100万円アップした北元喜朗理事長」と報じられました。貴殿は、これに対して「ノーコメント」をつらくぬくどころか、説明会で、アップを認めておられます。

以下に、真相を求める立場から、貴殿に対して以下の質問を致します。お答え下さるようお願い致します。

- ①団交にて、私たち教職組に対して、何故、「ノーコメント」とお答えなさったのか、その理由をお尋ね致します。
- ②貴殿は、5月11、12日の両日にわたる説明会で、理事長の報酬のアップを認めておられます。増額した理由をお尋ね致します。
- ③この説明会では、記事は正確ではない、とも述べておられます。ではどこが誤りでしょうか。また幾らの増額でしょうか。さらにはいつからアップしたのでしょうか。
- ④当然、理事会の決議を経て「100万円」のアップが決められたことと思います。理事長並びに団交に出席され、賃金、賞与、労働条件などの労使交渉の当事者としての貴殿、また理事会は、どのように責任をとられますか。大学の社会的イメージは、またも傷つきました。責任の所在と責任の取り方についてお尋ね致します。

お答えは、文書にて6月9日（水）までにお寄せ下さるようお願い致します。